

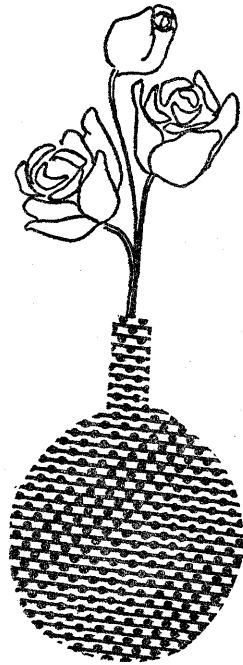
若いおかあさんたちへ

はるにれの会

向山陽子

この紙面で皆さんにお会いするのも、二度目となりました。

前回お話ししたように、私は三十歳を過ぎる頃から子どもを無性に産みたくなり、子どもはいらなまいっていた主人に、泣いて頼んで、主義(?)を曲げてもらって産んだ一人娘Mは三歳二ヵ月になりました。



私にとって、Mを産み育てることは、"はじめての経験であり、待望の子産み、子育てであり、そして、一度しかできない、たった一回きりの子産み、子育て"であると思っています。ですから、この一回きりの子産み、子育てを存分に楽しんいたつもりでした。

ところが、やはり、この"一回きりの子産み、子育て

て”という思いが強すぎて、母親であることを大義名分に
にして、妻であること、主婦であること等、他の役割を
軽視していたようです。

母親（娘に対して）であるのと同じように妻（夫に対
して）であり、同様に、娘（親に対して）であり、姉で
あり……そして主婦であり、嫁であり……。〔幼稚園教
諭でもあったのですが辞めました。〕

「母親であること」は、私の体に変化して得た役割で、
愛すべき我子との関係なので、大切にしたいけれど、子
どもの成長につれて、囲りの状況の変化によって他の役
割との比重を変えていくのだと気づきました。

娘が三歳になり、時おり見せる少女の片鱗に、畏れに
も似た感情でドキッとし、私のものにはなり得ない娘自
身が確実に育っているのを感じて、気づきました。

子育てを、抱いて育てる、手からおろして育てる、後
ろから見守って育てると分けるならば、娘は自分の道を
歩きはじめ、母親としては、口からついて出してしまう言
葉を必死のみこみ、見守る努力をする時がきたのかも

しれない。娘の方から私の膝にとびこんでくるのを待ち
わびる時が近づいてきたのかもしれないと心の準備をす
るこの頃です。

私の中には大きく占める「一回きりの子産み、子育
て」から、私自身がもう少し開放されよう。「一回きり
の子産み、子育て」は、私にとって、大切にすべき事実
で、この一回のチャンスに、さまざまな事を考え、行動
していくだろうが、今のうちに、私の全てをひきずりこ
んでいてはいけなさと、やっと気づいたのです。

いわゆる娘の自我の芽生えに触発されて、私自身も
「自立」を、促された形となりました。

「一生懸命の、一回きりの、子産み、子育て」をふり返
ってみると、私は母親のみになっていて、夫に対して
は、まさしく、「くれない症候群」でありました。

恋愛からの結婚生活十年の私達夫婦にとって、この子
産み、子育ての四年間は、男と女が父と母になっていく
変化の四年であり、夫婦間に、微妙なずれを生じた四年
でした。

夫は、働き盛り。(私は働かされ盛りと言う)

妻は、結婚前からの仕事を辞めた主婦一年生。

父親になりきれない夫への、母親になりきっている私からの不満。母親になりきってしまった、女も妻も忘れてしまった私への、夫の不満。

夫の帰宅は早くて十時、多くは深夜に及び、家では眠るだけで夫婦の会話など皆無に等しく、娘ばかりをかわいがり、私には優しいことばどころか、やることなすこと気にいらぬという顔をする夫への反発。

夜遅く帰宅すると、おもちゃも着替えた衣類も出しっぱなしで、娘と一緒に眠ってしまい、起きてはくるが、夕食の準備も満足にできておらず、私が仕事を辞めれば、夫へのいたわりが増えるのではとの期待は、見事にふられ、子どもにばかり夢中の私に対しての、夫のあきらめ。

そんな中で、私はますます日中の娘との生活にのめり込み、夫に対しては、「呼吸法、ラマーズ法を宗教だといつて全くうけてくれなかった。」「頼んでも、大きなお

なかをさわったり、胎内のMに声をかけてくれなかった。」「もう産まれそうな時も、又、乳児のMを抱いている時も、私を残して、さっさと先に歩いていった。」「生まれたばかりのMを、抱こうとしない。」「休日だけでも入浴させてほしいのに嫌がった。」「生後、三人の時を多くもちたいのに、休日に一人で遊びにいった。」「私に隠れて、他の女性と飲んだり、ドライブをした。」等。夫への不平不満がオリのように積もっていき、時には、寝入ったばかりの夫をゆすり起して、愛憎の感情を激しくぶつける私でした。

ある時、「夫に対しても母親の感情をもって接しなくては、男は父親にはなれない。」という言葉に出あいましたが、「優しくしてもらってもいけないのに、そんなことはできない。」と、夫に対してはあくまで受身の私でした。

無性に再就職したくなつた時もありましたが、その状況から逃避したいだけでした。

その状況から、私をぬけ出させてくれたのは、三歳に

なり、自分自身の道を歩きはじめた娘のMでした。

ある日の私の日記から。

・ ・ ・ ・ ・

Mが、私を見て育っています。

私が、母を見て育ち、反発しながらも、似た道を辿っているように。

夫へのさまざまな想いに、ひきずられている私ではなく、私の道を歩く私にならなくては。

Mが、Mの道を歩きはじめたのを感じてそう思います。

そうでなくては、二十年後、三十年後にMが再び、私の悩みを悩むことになる。

三人家族、三人それぞれが、それぞれの道を歩み、傷ついたり、疲れた身を寄せあい、頼りあう場所としての互いの存在でありたい。

難しい。

が、精神的自立……です。

(61・1・27・35歳誕生日記す)

・ ・ ・ ・ ・

こう記せた日から、夫への「オリ」のような感情は、不思議にとけて消え、娘との昼の生活——公園や、お友達の家、時には我家が遊び場となる——にも、再び意欲的にとりくめるようになったのです。

又、昨年から少しずつはじめた、児童館での手伝い。朗読の勉強、奉仕。音楽会のナレーションの仕事。そして、はるにれの会の会の活動にも、張り切ってとりくめるようになりました。

子産み、子育てから四年。

職場を辞めて二年。

私は、この二つの大きな変化に、やっと対応できてきたようです。

私の体力が回復し、体力と共に気力も充実してきたこともあるでしょう。

地域のこと、住民としてわかりはじめ、人とのつながりも、生活、子育てを通じたものとなり、住民として根づいてきています。

今の住まいには結婚と同時に住みはじめ、十年になるのですが、職場を辞める前までは職場と家の往復の毎日、地域住民としての意識はゼロに近く、「根づく」「生活」などという言葉には程遠いものでした。

多くの人がそうであるように、子どもを持って、衣・食・住の安全への関心も高まり、子育て仲間と話しあったり、より安心して生活できるための情報を交換しあい、助けあえるようになってきました。

この子育て仲間には、前述したような夫婦間のことも聞いてもらえ、

「向山さんは他の人には、寛大なのに、御主人には、どうしてそんなに心が狭いの。」

「旦那さんを大事にする程度に、落差がありすぎたんじゃない？話をきいていると、旦那さんが『あなたは変わった』というのわかるわ。」

「一生懸命、好きにならなきゃだめよ。」と悟してもらえます。

子どもの成長に関する事、衣・食・住の事だけでなく、夫婦の事、姑との事まで、心を許して相談でき、ぐちの言いあいではなく、優しく悟してもらえる、この子育て仲間は、私が職場を辞めた得た、最大の宝物です。娘のMにも、大切な仲間が、大勢います。○歳〜四歳まで、十数名もいるのです。

毎日、朝十時になると、誰かの家へ遊びにいたり、誰かが遊びにきたり……。お天気のいい日は、近くのぞうさん公園へ。お昼になると、午後の約束をして、それぞれの家へ。時には、お弁当を持って公園や、どこかのお宅で昼食です。この子育て仲間は、ぞうさん公園で知りあったので、「ぞうさんの会」と、名づけました。

水曜と金曜は、お弁当を持って、ちょっと遠い、歩いて二十分程の児童館の広い公園に、全員集合です。冬の風の強い日も、館内を利用して続いています。夏は、噴水に水が入り、子どもたちも中に入って、存分に水遊び

ができて、大喜びです。

こうして、毎日、夕方の五時、時には六時まで、遊びこむ毎日が続いています。

そして、母親はお互いに子どもをゆだねて、用事をしたり、一人の時間を作ることもできるようになってきました。

娘のMも、この「ぞうさんの会」のおかげで、ずいぶん、成長しました。

私が職についていたため、育児休業明けの生後七ヶ月から、一歳四ヶ月で辞めるまで、Mを保育ママさんに預けていました。

生後七ヶ月というのは、人みしりの頃でもあり、その一ヶ月前から百日咳を患って、病みあがりでもありました。もっと早くから預ければ……又、もっと長く育児休業をとれば……という意見もありましたが、職場との関係、難産であった私の体力の回復などを考えると、これしかなかったのです。

そんな状態で預けられ、急にあわただしい生活に移り、母子関係もゆっくりとれない毎日でした。Mは、七ヶ月間、毎朝、私を泣いて追いました。毎日、私も泣きながらの通勤でした。

朝七時に起き八時には家を出る。夕方五時半に迎えにいき八時には眠ってしまふMでした。母子での時間は三・五時間。この間、食事、入浴、買い物で毎日が終わっていきます。

そんな母親との生活なのに、母親を追って泣き叫ぶ毎日でした。神経がビリビリしたMになっていきました。保育ママさんが写してくれた写真には、つまらなそうに写っています。保育ママさんは「元気でしよう。」といいました。母親の私は、Mのもっと生き生きとした、いたずらっぽい目を知っていたので、その保育ママさんの言葉はとてもショックでした。保育ママさんは、「とても頭のいいお子さんで、私の要求をすぐわかり、すぐ応えてくれます。」といました。Mの気持が痛いほどわかりました。一歳なりにとても気を使っていたのです。

Mを犠牲にして、私が勤めを続けるわけにはいきませんでした。

私が辞めて、母子で公園に遊びに行くようになってからも、Mはピリピリした子でした。

神経の細い、消え入りそうな子だったとよくいわれます。

毎日の公園通い、母子でよく遊びました。でも、元保育者の私が泣いている他の子の方を向いただけで、「ダメー」と泣いて、私にしがみついてくる子でした。

半年たった頃、やっとピリピリした感じがなくなってきました。

毎日、友だちと母子でよく遊びました。

一年たった頃、「Mちゃんてこんなにビビッドな子だった？」といわれるようになりました。

二年たった今、一人でお友達の家へ遊びにいけるまでになりました。

ぞうさんの会の、暖かいおかあさん達、子どもたちのお陰です。

これからも、この会のお友達を大切にしていきたいです。そしてこの中で、Mも私も成長していきます。

私が職場を辞めたのは、今のようなMの状態が最も大きな原因でしたが、やはり「一回きりの子育て」を、自分の手ですててみたいという欲求が、大きく働いていました。

できれば、続けたい職場でしたので、いろいろ保育園を見て歩きましたが、結局、満足のいく園が見つからず、「私が育てれば、ああもできる、こうもできる。」「集団だとしても指導の名のもとにも、不自然さや、管理の影がちらちらする。」という思いが残るのです。

例えば、砂場で興がのつてきた時に「○○ちゃん、ごはんですよ。」の声がかかったり、

昼寝をしたくないのに、寝なくてははいけなかったり
……。

一回きりの子育てだから、トイレトレーニングも私がやってみたいし、服装も半ズボンのみと規制される

のでなく、自分で選ばせてやりたい、等。

また、自然がいっぱい残っている練馬に住んでいるのだから、母子で存分に季節の移りかわりを楽しんで生活したい。職場と家の往復で、私に地域に足場がないように、保育園と家の往復だけでは、生活に幅もなくなるのではないか、という気持ちもありました。

母の懐、家の中、近所、地域と、徐々に生活を広げていってやりたいという思いもありました。

そして、決定的だったことは、水遊び、泥遊び、切り紙やのり、えのぐ等、ごちゃごちゃ、ぐちゃぐちゃした遊びを存分にさせてくれる園がみつからなかった事でした。

もしも、思いきり、太陽を浴び、水と泥に全身をゆだね、泥んこになりながら、キャッキャッと笑い声をあげている子どもたちがいる保育園をみつければ、草木や、鳥や、雲たちと友達になり、空想の羽を思いきり飛ばして遊ぶ子どもたちがいる保育園をみつければ、

Mをその園におまかせして、一回きりの子育てをその園に托せたかもしれません。

でも、理想の園はみつからなくてよかったのです。

私は今、娘が豊かな幼児期をすごせるように、夫が安らげるように、仲間のいるこの地域で生活することが、私を豊かに、成長させてくれる、といえるようになりました。